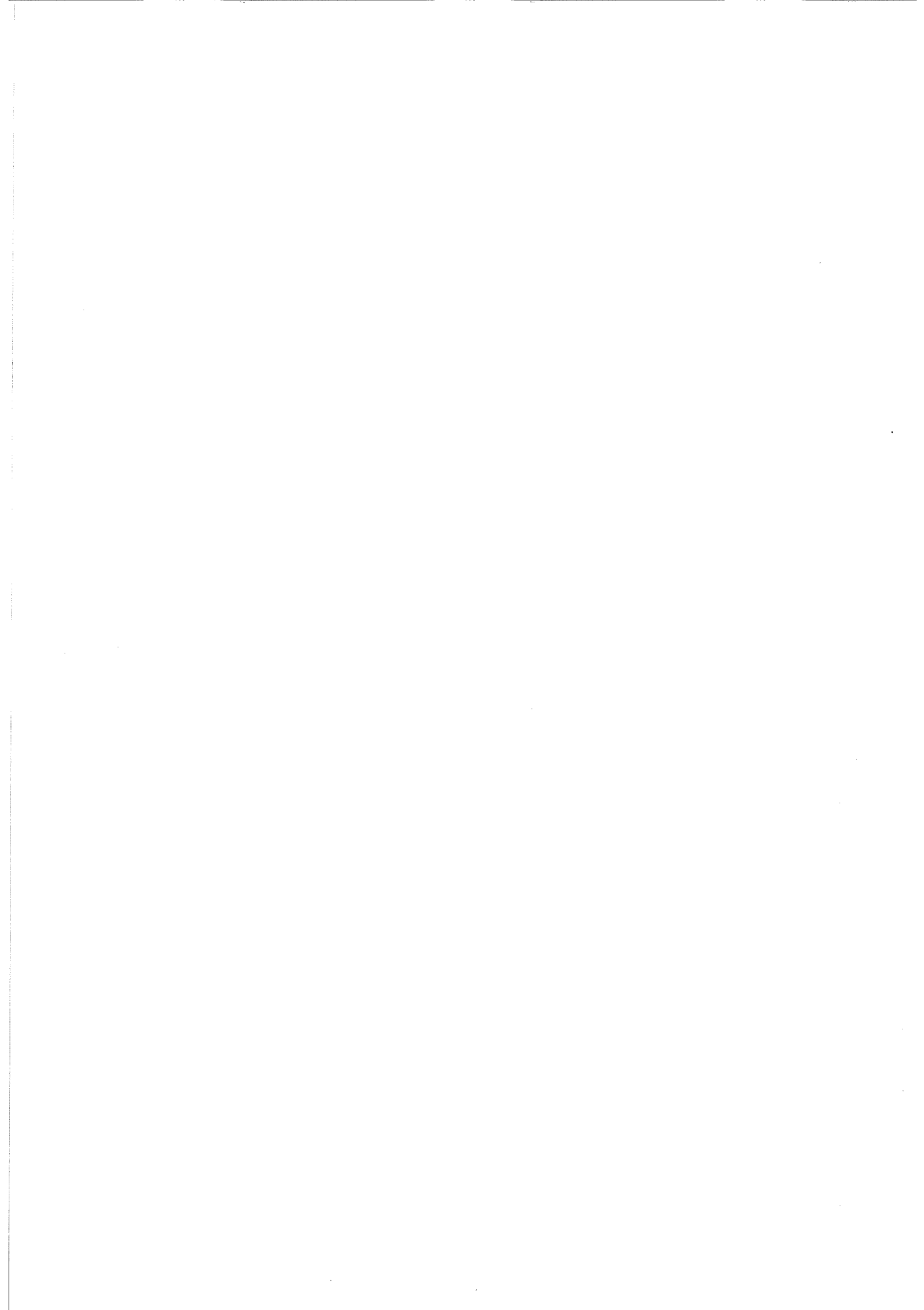


# 令和四年度 中学校入学試験問題

## 国 語

### 注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。試験開始までの間、この注意事項をよく読んでください。
- 二、この問題冊子は14ページです。
- 三、この問題冊子や解答用紙に印刷が悪くて見にくいところや汚よごれなどのある場合は、手をあげて監督かんとくの先生に知らせてください。
- 四、答えはすべて別紙の解答用紙に書き、記号で答えられるものは、すべて記号で答えなさい。答えを文中からぬき出す場合は、「、」「。」などの記号も一字分に数えなさい。
- 五、解答用紙の受験番号、氏名を記入する欄らんは用紙の最後にあります。最初に記入しなさい。
- 六、試験終了後は解答用紙のみを提出し、問題冊子はそれぞれ持ち帰ってください。



一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

戦後五年ほど、私は、東北のいなかに暮らしていて、半年に一度くらい東京に出てきたが、そのたびに東京のようすは、見るもの、聞くもの、<sup>※1</sup>のぞき目がねからのぞく景色のようにガラリガラリ変った。

はやりことばでいえば、ある時出てきて、「<sup>※2</sup>とんでもはつぶん」ととりまかれるかと思うと、つぎの時は、「あじゃばー」になる、というぐあいであった。上京するたびに新しいことばをおぼえたが、そのつぎに出てくると、前のことばは使いふるされて、すてられている。

生活の流れの一ばん表面に近い、はやりことばにたとえていえば、そのころの東京のテンポ——東京と限定するのは、<sup>①</sup>そのころ、マスコミの手は、今日ほど津々浦々にとどいていなかったから——は、そういうことだったけれど、そのもう一つ底のところ、<sup>※3</sup>オリのようになまっていた傾向は、<sup>※4</sup>儀礼の廃止と敬語の減少だったかもしれない。

戦後五年で、東京に出てきて、ある会社に顔をだすようになったら、社長さんや重役さんはべつだったが、<sup>②</sup>一般社員は、私におじぎ一つしてくれない。(この人たちが、おじぎをしないのは、私にたいしてだけでなく、社長さんや重役さんにたいしてもだつたらしい。なぜなら、日本は、民主主義になったのだから。)

世の中はかわった、と、私は思った。アメリカでは、<sup>※4</sup>エチケットの本が、いつもしずかなベストセラーだと聞いたが、日本のエチケット——こういうことばが、そのころはやっていて——は、必要なくなつたのか、と、私は考えた。

そのころ、私より二十ばかり年上の先生が、私につぶやかれたことがあった。

「このころの若い人は、わたしたちが『かしまりました』とか、『承知いたしました』というところを、『承知しました』とか、『わかりました』っていうんですね。ときどきびっくりしますよ」

「でも、先生、それ、わるい返事ということはいえませんでしようね。時代といつしよにことばがかわるってことなんでしょうか」

などと私たちは話しあつた。

<sup>③</sup>けれども、戦前に育つたということは、しかたがないもので、私も、ひとから何かたのまれれば、「わかりました」とはけつしていえない。

相手が年上か、儀礼をつくす場合は、「かしこまりました」というだろうし、でない時は「承知いたしました」というだろう。(ついでにいうと、「いたす」ということばは、なんて微妙で、おもしろいことばだろう。私は好きである。)べつに、そうと規則できめているわけではないけれど、自然にそういう返事が、出てくるだろうと思う。

くだいようだけれど、戦前に育つて、そういう固定観念ができてしまつていてということとはしかたがないもので、若い人にものをたのんで、「わかりました」と答えられると、「ブー」と鳴ることを期待していた汽笛が、「キー」と鳴つたようなびっくりりさは感じる。

<sup>④</sup>でも、まだ私は、「わかりました」をわるいとは断じない。わるいか、いいか、まだ答えがでないのだと思つている。「わかりました」は、わけのわかつたことばだし、これから先、日本人が、しんぼうづよくこれにみぎをかければ、いい返事になるかもしれないではないか。

この「わかりました」問答のすぐあとのこと——古いことばからならべるのは、そのころ、東北の山の中から出てきたばかりの私には、東京はおどろきに満ちていたから——ある男性の友だちが、大学で教えている女学生の手紙を、見せるともなく見せてくれた。

私は、おどろきあきれてそれを読んだのだが、それには、

「けさの空気がすこしばかりつめたくて

おいしかった。

お熱でませんでしたか。

グラジオと白壺<sup>はっこ</sup>！

壺の色がすきだな。

お元気で。」

と書いてあった。

これは、いったい、何？ 詩？ それにしては、三行めがおかしい。

病気見まい？ それにしては、⑥が変である。もやもやとした、

あまえた恋文<sup>こいごみ</sup>？ そんなものかもしれないなかった。

それにしても、新時代の学生は、先生にこういうたよりを書くのかと、私の神経は「キーキー」鳴りつづけ、この手紙をおどろきもしないでうけとっている先生を、私はけいべつした。

じつは、私は、この手紙の文句を暗誦<sup>あんしゅう</sup>していたわけではなく、友だちが座をたつたすきに写さしてもらったのである。何年かたって、出してみて、これがまともに見えたら、私は考えなおさなければならなかった。

この原稿を書くので、その古ノートをさがしてみたら、首尾よく見つけ、私はもう一度この手紙を読んだのだが、前とおなじようにばかりしかった。先生と学生のあいだに、恋愛的な気もちがあつてはならないなどというつもりはない。<sup>⑦</sup>この教師と学生のあいだには、いい精神も、

いいことばを生みだす動きも、すこしもないように思えるのである。

いま、この詩(?)を写しながら、私のうけた、またしても戦前の教育のことを考えていたら、小学二、三年のころの小さいできごとを思いだした。

ある日、お掃除当番をすまし、教室のうしろのすみにある先生の机のそばを通って帰ろうとしたら、「石井さん」とよびとめられた。その先生は、男の先生で、私には、かなり年よりに見えたけれど、多分三十くらいだったのだろう。

「シウトウすんだかね？」というようなことを、その先生は聞いた。

(いま思いますが、この先生は、時どき、子どもをよんで、このように話しあっていた。)

私はモジモジして、シウトウといういみがわからないことを先生に知らせた。

すると、先生は、

「え？ シウトウ知らない？」といって、そのことを説明してくれた。

ああ、シウトウって、家でホウソウをうえるといっていることなんだなと、私はさとして、その時に適応した返事をしたように思う。けれど、その時、私の気になってならなかったのは、その問題点ではなくて、ほかのことだった。

「イエス」のいみを先生にいう時、私は、「ああ」ということばを使っていたのである。

『ああ』でなくて、ほかのことばがあるはずだ』と思いながら、先生のまえに立っていた。つまり、「ああ」という返事は、その時、あの顔つきで私に話している先生にたいして私がついている気もちとつりあつていなかったのである。

そのころの家庭はのん気なもので、私の母など「先生には、こう返事するんですよ」などといったことは一度もなかったし、私も、家に帰って、学校のことを報告したおぼえはほとんどない。また、いつごろから、先生に「はい」とか、「ええ」とかがいえるようになったか、それにつ

いても、すこしもおぼえていないが、「ああ」では気がすまなくなったのは、たしかに七才か八才で、先生と向かいあってシユトウの話をした時だった。

相手にたいする、この気のすまなさが、「いたす」を生んだり、「しつれい！」を生んだりするのだと思うのだけれど、どうだろう。

けさもけさとて、私は考えてしまったが、ある新聞社から電話がかかって、若い女の人に原稿を書けといわれた。いま書けない状態だといったら、では、会って話でもいいということだった。甥の結婚式が迫っていて——これは、ほんとうのことである——いまとてもいそがしいのだと断わったら、そのひとは「それじゃ、いいです。」と許してくれた。

「では、ごめんください。」と電話をきって、私は笑いだしてしまった。腹をたてていたなら、きりがなからである。

**B**、ほんとうは、笑ってすましてはいけないのだろう。

先日、スイスから、ある夫婦が来日して、会ったのだが、その二人の話しあっているのを聞くと、たがいに「ビツテ? ビツテ?」といいあう。そのふたりと私の共通語は、ブロークン・イングリッシュだった。そして、かれらは、夫婦間ではドイツ語を話した。私は、ドイツ語はわからないから、何を話しているのかわからぬが仏なのだけれど、あいだにはさむ「ビツテ」だけは、「いま、なんていった? すまないけれど、もう一ど」とか、「どうぞ、もう一ど」といういみだということを知っていた。

「え?」とか、「なに?」とか聞きかえすのにくらべて、なんていいことばだろうと思った。**C**、このことばだって、相手を尊重しないところには生まれなかつたらうし、戦後、ドイツ語を話す人たちは、

それをすててこなかった。

あるイギリスの詩人が、少年少女に「詩」について語って、ことばはだいにしなくてはいけない、ことばは、みがけば光るものだ、詩人が使うのは、そういうことばなのだといっている。

私たちは、詩人でないから、それほどみがきはかけられないだろうが、少なくとも、使ってはすて、使ってはすてでは、いいことも残らないだろうし、ひとにものをたのんで、「それじゃ、いいです。」で気がすんでいたのでは、<sup>⑩</sup>いい国にはなれないだろう。

(石井桃子「みがけば光る」より)

※1 のぞき目がね……大きな箱の中に入れた数枚の絵を転換させ、のぞき穴から見せる装置。

※2 「とんでもなつぶん」「あじゃばー」……はやった時期は異なるが、共に当時の流行語。

※3 オリのように……時間をかけて少しずつ良くないものがたまっていく様子のたとえ。

※4 エチケツト……人とつき合うときの、他人に対する心くばりや作法。

※5 シユトウ……種痘。天然痘の予防法でウシの疱瘡からつくったワクチンを、人のからだにうえつけること。

※6 ホウソウ……疱瘡。ウイルスに感染しておこり、高い熱がでて、ひふにできものができる病気。天然痘。

問一 ～～Aとあるが、「つぶやかれた」の「れ」と同じ意味で用いられているものを次から一つ選びなさい。

- ア、卒業式で、先生がみんなから花束をおくられた。
- イ、試験中に、先生のはげましの言葉が思い出された。
- ウ、体育の授業中、先生が逆上がりの手本を示された。
- エ、教室でさわいでいると、いきなり先生があらわれた。

問二 B、C に当てはまる語として、適切なものをそれぞれ選びなさい。

- ア、やはり           イ、すると
- ウ、そのうえ       エ、でも

問三 ①とあるが、どういう意味か。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア、東北には東京の様子が報道されていなかったということ。
- イ、ラジオなどの影響が全国には広がっていなかったということ。
- ウ、日本各地ではそれぞれ別のことがはやっていったということ。
- エ、テレビ局などが地方に進出する力がなかったということ。

問四 ②とあるが、なぜか。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア、一般社員の立場で、上司や会社の外の人に対してなれなれない態度をとってはいけないから。
- イ、時代が変わって、若い人にとっては礼儀をもって接する必要が感じられないから。
- ウ、民主主義になってエチケットが必要なくなり、他人を敬うことがなくなったから。
- エ、重要な立場の人は相手に応じたエチケットが求められるが、一般社員には必要ないから。

問五 ③とあるが、なぜか。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア、「わかりました」と言っても、たのまれたことが自分にできるかどうかわからないから。
- イ、「わかりました」と言うと、めんどろな仕事だったときに断れなくなってしまうから。
- ウ、「わかりました」という返事は、相手に対して丁寧さが足りないように感じられるから。
- エ、「わかりました」という返事は、儀礼的すぎてかえって失礼に思われてしまうから。

問六 — ④とあるが、筆者はどのように考えているのか。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア、「わかりました」は、個人的にはすきではないが、よく考えて使っていけば返事としてふさわしいことばになっていくだろう。
- イ、「わかりました」は、「かしこまりました」などに比べてわかりやすいことばであるから、今後は良い返事として認めたい。
- ウ、「わかりました」は、戦前の人間には違和感のある返事だが、これからの日本人はそのような固定観念にとらわれてはいけない。
- エ、「わかりました」は、わるいことばというわけではないが、年上の相手を驚かせてしまうのでよいことばだとは決していえない。

問七 — ⑤とあるが、ここではどのような意味で用いられているか。それを表す語を本文より五字以内でぬき出しなさい。

問八 ⑥ に当てはまることばとして、最も適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア、最初の行      イ、四行め
- ウ、五行め      エ、最後の行

問九 — ⑦とあるが、筆者はどのように対して、このように考えているのか。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア、学生は教師にあまえて、いい加減なことばを用いた手紙を書き、教師はそれを直そうともしないこと。
- イ、学生があまえた表現の手紙を送ったのに対し、教師はおどろきもせずに学生の好意を受け入れていること。
- ウ、学生はわかりにくい表現で恋文を書き、受け取った教師は意味がわからないまま私にあずけてしまったこと。
- エ、学生が教師のためだけに書いた恋文なのに、他人である私に平気で見せた上に、写させてしまったこと。

問十 ——⑧とあるが、「ほかのこと」とはどういうことか。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

ア、「シュトウ」ということばの意味がわからないので、「ああ」というあいまいな返事しかできずにいたのは、先生に対して気がすまなかったということ。

イ、昔の家庭は子どもに先生に対する返事の仕方すら教えず、子どもは学校のことを家庭に報告することも少ないなど、今にくらべてのん気なものだったということ。

ウ、どんな場であつても、先生に対する返事は、「ああ」という無作法なことばではなくて、もっと丁寧なことばでなければならぬ気がしたということ。

エ、先生に対して「ああ」ということばではなくて、「はい」とか「ええ」とかがいえるようになったのが、いつのことなのか、少しもおぼえていないということ。

問十一 ——⑨とあるが、「許してくれた」という表現には、どのような気持ちがこめられているか。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

ア、しつこくたのんでくる相手を、説得できたことに対する安心感。

イ、困っている相手のたのみごとを、断ったことに対する後悔。

ウ、ものをたのむのにふさわしくない、相手の無礼な態度への嫌味。

エ、自分のいそがしい事情を理解してくれた、親切な相手への感謝。

問十二 ——⑩とあるが、筆者のいう「いい国」になるためには、どのようなことをする必要があると考えられるか。本文中の語句を用いて二十字程度で答えなさい。

問十三 次に示すのは、本文を読んだ後に、四人の生徒が話し合っている場面である。本文の内容にあわぬ意見<sup>いけん</sup>を次から一つ選びなさい。

ア、生徒1——毎年、流行語大賞というのが選ばれるけど、去年の大賞のことはばを使うのは恥<sup>は</sup>ずかしいような気がするよね。これも筆者のいう「前のことはばは使いふるされて、すてられてい<sup>い</sup>る」ってことかなあ。

イ、生徒2——筆者は「時代といっしょにことばがかわる」ともいっているよね。流行語を使うことが必ずしも悪いわけじゃなくて、時代にあわせてわたしたちのことばも変わっていかないとい<sup>い</sup>けないってことだね。

ウ、生徒3——筆者には「わかりました」は自然な返事ではないみたいだね。「しんぼうよく」「みがきをかけ」たかどうかはわからないけど、私には違和感<sup>いわかん</sup>がなく思えるよ。だからふつうに使っているのかなあ。

エ、生徒4——ちょっととした返事をするにしても、このことばでいいのかなって思うことは私もあるよ。ことばを受け取る相手の気持ちをよく考えて、自分の使う「ことばをだいにしなくては<sup>い</sup>けない」ってことだね。

二、次の文章は、幸田文の「髪」の一節である。継母が亡くなった後、「私」の手元に継母の身の回りのものが戻ってきた。以下はそれに続く文章である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(本文は一部現代かなづかいやひらがなに改めてある。)

身のまわりのものがそつちの家から私の手もとへ移されて来た。血につながる子でなく、縁につながる母だったから、どちらにもそれ相応の不しあわせがあった。怨んだり憎んだりした、それだけなら易しかろう。怨み憎みのひまひまに愛情もまざるとなつて、さて人と人とのあいだはむずかしい。ははにも私にも本来似ている性格があつたし、なんにしても長年育てたり育てられたりしていれば、たがいにあくの強いところには惹き惹かれて似ても来るらしく、したがつてよくわかりあい庇いあひました。が、はははおとなの潜めた執念ぶかさもつて対していたし、私は若さのやりてんぼうを振りかぶっていたし、絶えず相似から来る葛藤、乖離から生じる親愛がくりかえされてい、むしろ他人ならうまく行つたかと考えられる組みあわせだった。しかし、ははと子の不和反感おくぶかは奥深い観念から発生するように見えて、じつは愚にもつかない日常の雑事・感情からはじまつて堆積たいせきしていた。だから、かつて毎日見なれ、今またしばらくぶりで眼にするははの世帯道具は、②どれもこれもこれにも古い傷を語るしみが再現のなまなましさをを見せていた。箆たんすがでくんとしていれば、不機嫌ふきげんで食事もせずすわり通していたははの強情さを思いだすし、鏡がきらつとすれば、たつて行き際にちらりと捨て眼を置いて行く癖くせをおもう。かと思えば、ばか大きいメリヤスの足袋たびが出て来て、それには神経痛を苦しがつて三枚もこんな足袋を重ねていた気の毒さがよみがえる。白髪染しろがぞめで黒く染まつた櫛くしの齒を見れば、あれほど自慢だつ

た髪の毛の美しさもうかんで来るといふものだった。親子といふもの、生活といふもの、その根強さ、ずぶとさが古い道具類に浸み透とおっていた。なまじいに古傷をまさぐられるような苦々しさは濃こく、死の哀感あいがんはかえて薄うすく、③がらくた片づけはいやなしごとだった。

赤い針あかさが残つていた。むろん手製の、④たどうのような形がちよつとばかり風変わりな出来だった。ははは手芸も器用にしたが、どういふものか日本風の針箱を用いない人で、いつもこの携帯用けいたいみたような針さしをつかつていた。赤い針さしはいつの間にか置き場所のないままに私の粗末そまつな裁縫用具さいほうと同居していたが、私には私の潔癖けつぺきがあつたし、家人もこれを使うともなく使わぬともなく、⑤あたら針さしはごろちゃらしながら、経たつに早く、もう四年がたつていた。

「かあさま。ちよつと来て見てよ。これ見て頂戴ちやうだいよ。」声になにか本気な響ひびきがあつて、私は洗濯せんたくを捨てた。ちよつとも早く見せたいために、すわつた縁側えんがわから襖ふすまのほうへ向けてさし出した娘の手さきにつままれて、えたいの知れないものが、射さし込む冬の陽ひを切り返してきりきりりとしていた。

⑥「なあに、それ——」  
見ると、いやなものだった。毛ともいえず針ともいえないものだった。⑦無尽むじんに絡みあつた毛のかたまりから、毬いのように針が突き出していた。のろのろとそこへすわり、見つめた。

「これをね、も少し小さくこしらえ直そうとおもつてほだいたんだけど、こんななんでももの、あんまり気味がわるくつて——どうしようかと思つちやつて。」

⑧なるほど、ほだいた赤いきれがあたりに散つていた。ゆるしを乞こうよ  
うな娘のまなざしが私を見た。

「こうすると泣くみたいなの。」へらで押えられると、かたまりはかすかにきしんで音を立てた。ぞわぞわとこちらの毛あなもきしみそうなのを娘の手前かくすつもりで、両手にもみあげを押さえてこらえると、こわばりが筋肉を伝って這った。

「何年になるのかしら、この針さし。」

私はだまっていた。三十余年、そう四十年に近いだろうか、ははが人には後妻と呼ばれて私にはままははになって嫁入って来たときから、私はその針さしをかわいいと知っていたのだ。折れた針、曲がった針、木綿針、絹針、蒲団と同じ、メリケン針、これほどどっさりものを呑んでいながら、上っ面は赤いきれを着てかわいげにいた針さし——だが。

「これ、あたしが片づけるから玉子はもうおよし。」見のこして、娘は次へたって行った。

毒針のように用心してかかっているくせに、指は心の動きの猛々しさにひっかかって、たびたびちくちくとした。何度ちくちくしてもやめずに、一本一本抜いて行った。抜いても抜いても、かたまりはなおしんに固くしこっていた。からだのしんにぶすつと刺さって私にままつ子の針一本が、たしかに顫えていた。伏兵のようにつんと出て来たり、しぶしぶ押し出されて来たり、毛は針に噛まれ、針は毛に畳まれていくらしく、はてしなく思われた。

やりかけの洗濯もなにも忘れていた。完全に毛だけになったかと思っかたまりを、ゆっくりと、しかし大胆に、握ったり放したりして試み、私は満足だった。なごんだ気もちが、さらにその毛だまをも緩く解きひろげる作業をそのかした。ややあつて緩みはじめた。そのときになつてはじめて、それがははの抜け毛ではないかと気づいた。しずまった胸にまた思いがのぼる。ひっぱると毛は抵抗を感じさせ、のちに強靱にぶ

つときれ、つづいて二本三本、長くひきぬけて来た。

ははの髪は自慢に値する髪だった。量、長さ、色、つや、申し分なくいながら、皮肉なことに持主の意に逆らう髪だった。あまりに多くあまりに強過ぎて、ははの望む優しい髪がたには結いあがらないのだった。ふけ落し、白髪ぬき、その後は白髪染と、深くて行く齡とともに何度私には手伝わされただろう。はははその度にじれて癩を起こしたし、私も途方にくれて腹を立てた。

一本一本力余って緩い反を打ってねじれているのが特徴だった。よく確かめようとし、陽かげはもう膝をうつっているのを、ほっと知った。

抜け毛に齢はないものだろうか。からだを離れて三十年の余も押しかがめられていたとは信じられない髪だった。多少の軽い癖がついてはいるものの、いま頭からとれて来たものとしてもさしつかえなかった。これが何万何千本みごとに揃って黄楊の櫛にすかれ、束ねる手から余ってこぼれた触感が、量感がおもい出される。

おやと思う。それが動いたようだった。風か？ 熟視し、それはほんとうに動いたのだった。陽に光りながら、ちようど癖になった個処で、ごくわずかに浮いて反るものようだった。かたまりの中からほかのを引きぬいて、ちようどそこにあつた白い包み紙の上に置いてためすと、毛はやっぱり陽を吸うと夢のようにふわつと動き、若い女の伸びをするすがたがとつさに連想された。——火鉢のそばとか筆筒の隅とか——窮屈にころりとして——ほんのひと睡りだけが深く寝入って——ふつと醒めて——本能的に頭だけをもたげて——見まわして——ずずつと背なかですつて畳を漕ぐ——幾分胸や腰が浮いて、爪さきから指までの線がぎゅうつと張る——び、び、びと快さが走る——力が落ちて胸のカーヴが元のやわらかい平安にしずまる、そんな姿をまどわせて毛の

かがまりは伸びをした。

若かったのはの寝姿、夏などよく簾すだれの蔭かげで寝入っていたその姿、竹に雀すずめの模様ようめいのゆかたを着ていたつけ。

そのははは、くるつと畳たたみに手をついて、むこう向きに起きあがった。髪に手をやって、にこつとこちらへ振り向いた。機嫌きげんのいい時にする、おどけた笑顔えがほでこちらを見ている。「よかつたわあたし、もうままははじゃないもの。」そう云いった。いえ、そう聞きこえたようだった。いいえ、それも違ちがう、私がそう云いわせたんです。でも、声はほんとうに天から降ちかって来た、ほんとうに。

白いカーディガンの玉子が、ちいさいガラスのあき壇びんに、そのおびただしい針はりを詰めめて、匂においのある油あぶらをさしている。「埋うめるにしても流ながすにしてもねえ——」

冬の陽ひかりのなかに私はからだばかりをぬくぬくといて、げそつと気もちが削そぎ落ととされていた。

「この毛け、どうしましょう。」

「そうねえ」と濁にごして、私はいつも自分たちの始末する通りに、風呂ふろの火かの盛さかんなどときにくべようときめていた。燃もえさかる火かには威い厳げんがあるものだった。威い厳げんのもとに人知ひとれず委ゆたねて、無なに送おくりかえしたかった。そしてそうした。針はりはまだにそのまま私の針箱はりばこに入れてある。

ははは「ままはは」という縛しばられから、にこつと笑わらって、はつきり脱ぬけ出て行いったにちがいない。私もとうに、「ままつ子」から解とき放はなされていたはずだった。

おもえば長いような、また短いようなつながりだった。死しなれたのちの親子おやこのつながりというものは、生前生前にくらべて、おそらく較くらべものにならないほどの遙はるけさになお続くのだろう。

(幸田文「髪」より)

※1 やりてんぼうを振りかぶって……やりたいほうだいして。

※2 乖離……離ればなれになること。

※3 でくんとして……大きくて重みのあるものがたれ下がるさま。

※4 メリヤス……伸縮性のある織り物の一種。

※5 針さし……縫い針を刺しておく道具。針がさびないように中に綿わたや毛髪けを入れてつくる。

※6 たとう……たとう紙のこと。折りたたんで包む紙。

※7 あたら……もつたいなくも。

※8 無尺……かぎりがないこと。

※9 後妻……妻と死別などした男が、そのあとで結婚した妻。

※10 蒲団ふとんとじ……ふとん針。ふとんに綿わたを入れた口をとじる時や、綿が動かないように飾り糸をとじつける時に使う長い針。

※11 伏兵……敵の不意を襲うために、ひそかに隠れている兵。

※12 黄楊わうやうの櫛……常緑の低高木。くしなどの材料にする。

問一 — ①とあるが、「おとなの潜めた執念ぶかさ」とはどういうことか。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

ア、その場が過ぎると子どもは忘れてしまうことを、大人は覚えていて、また蒸し返すということ。

イ、子どもが反発するようなことを、大人は心にしまいこんで表には出さないでいるということ。

ウ、子どもが気にもとめないことを、大人は大ごととしてとらえて、何度もしかりととばすこと。

エ、他人同士の関係というより、親子のように深い感情のもつれを持って接していたということ。

問三 — ③とあるが、なぜ「いやなしごと」だったのか。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

ア、遺品にふれると、ままははとの懐かしい記憶が思い出されて悲しくなるから。

イ、遺品を見ると、ままははとうまくいかなかった気持ちを思い出すから。

ウ、遺品から感じる母の神経質な性格が、今の自分の気持ちをあらだてるから。

エ、遺品に染み込んだ生活の記憶が、道具類についた傷として残っているから。

問二 — ②とあるが、「古い傷」とはどのようなことをたとえたもの

か。本文より十字以内でぬき出して答えなさい。

問四 — ④とあるが、具体的にどうすることか。次の文の空欄に当

てはまるように、本文より五字以内でぬき出して答えなさい。

洗濯を (五字以内) にしておくこと。

問五 — ⑤の「なあに、それ——」の「——」には、「私」のどのような思いがこめられていると考えられるか。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

ア、娘の見せたものが始めから母の針さしだと気づいていたが、娘に気づかれてしまい、何とか無視しようとしている。

イ、母との記憶をつなぐ針さしだとすぐに気づき、娘に当時の仲の悪い親子の関係を伝えづらく、言葉に困っている。

ウ、母の使っていた針さしだと気づいたが、なんとなく娘には母の話をしたくなく、言葉をつまらせている。

エ、母が髪の毛を巻き付けていた針さしだと気づいたが、娘にさわってほしくなくて、どのように言おうか迷っている。

問六 — ⑥とあるが、「私」は「誰がどうしたこと」について「なるほど」とわかったのか。五十字程度で「こと」につながるように説明しなさい。

問七 — ⑦とあるが、「私」のどのような気持ちが描かれているか。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

ア、親子関係がこじれて、ままははに自分が毒づいていた頃を思い出し、自分の態度を後悔している。

イ、ままははが、自分に対して厳し過ぎるほどの接し方をしていた記憶が忘れられないで、憎しみを持っている。

ウ、ままはははどの気まずい関係を思い出したくはないのに、その記憶があふれ出てくることを嫌に思っている。

エ、ままははながら、自分の痛いところをついてくれるような教育をしてくれたことをとても感謝している。

問八 — ⑧とあるが「痼を起こす」とはどういう意味か。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

ア、少しのことでも激怒する

イ、ささいなことに手段に迷う

ウ、ちよつとしたことにこだわる

エ、たわいないことにおびえる

問九 — ⑨とあるが、ここから読み取れる「私」の気持ちとして最も適切なものを次から一つ選びなさい。

ア、ままははが残っていた針さしをほどこ時間の中で、ままははとのいやな思い出ばかりが思い出され、都合のいいときだけ笑うままははの嫌な部分を改めて見つめ直している。

イ、針さしの中から出てきたままははの毛を見ているうちに、若かった頃のお互いのやりとりを思い出し、ままははとままっ子のようなすれ違いの関係ばかりではなかったと思いはじめている。

ウ、針さしの中に隠されたままははの毛はピンとしていて、まっすぐ自分にぶつかってきたままははの気の強さと共に、自分を見捨てるように亡くなったままははを改めて悲しく思い出している。

エ、針さしを分解する玉子の様子を見ているうちに、ままははと自分の関係を思い出し、大人になった今、厳しかったままははのことを忘れようという気持ちになりかけている。

問十 — ⑩とあるが、なぜこのようにしようとしたのか。最も適切なものを次から一つ選びなさい。

ア、切りたいと思っても切れなかった母とのつながりを切ることで、できるのが、その時だと考えたから。

イ、自然の力を利用することで、死んだ後も感じていた母とのあたたかい思い出に別れを告げようと考えたから。

ウ、自分の意志をこえた力に任せて、ままははとまま子というしがらみから解放されようと考えたから。

エ、娘とのやりとりで親子の絆を改めて問い直し、自分とままははとのつながりを改めるよい機会だと考えたから。

問十一 この文章の描き方と内容の説明について、最も適切なものを次から一つ選びなさい。

ア、独特の擬音語を使うことで、他の人とは違う自分の感性を強調し、「ままはは」との関係の独特さを描こうとしている。

イ、針さしをほどこ中で出てきたままははの毛を見ながら、ままははへの気持ちがゆるむ様子とを重ねて描こうとしている。

ウ、年を重ねることで、自分がなくなったままははに似てきていることを、針さしの髪の毛に託して描こうとしている。

エ、ままははの厳しいしつけを針さしの針にたとえる一方、おらかな生き方をままははの毛を通して描こうとしている。

三、それぞれの問いに答えなさい。

問一 — 部について①③は漢字を、④は読みをひらがなで書きなさい。

- ① エンロはるばるやつてきた。
- ② ハクガク多才な人物。
- ③ 公園をサンサクする。
- ④ 山の頂に登る。

問二 次の — 部の表現は誤<sup>あやま</sup>っている。解答用紙に合うように正しい慣用表現に直しなさい。

後で結果をくやむまいと、たかをくくって試験に臨む。